Shinran 850th 800th

京都教区

2022年10月1日発行

慶讃だより

2022年 秋号

〈慶讃テーマ〉

南無阿弥陀仏
人と生まれたことの意味をたずねていこう

- 慶讃テーマから問われてくること
- 慶讃テーマ委員
- 8地区より
- 地区または組お待ち受け大会特集
- 各地区のお待ち受け始まる

宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃法要（きょうさんほうよう）
第1期法要/2023年3月25日(土)～4月8日(土)　讃仰期間/2023年4月9日(日)～4月14日(金)　第2期法要/2023年4月15日(土)～4月29日(土)

南無阿弥陀仏
人と生まれたことの意味をたずねていこう

慶讃法要テーマに関する教学委員会委員
慶讃テーマ委員
中山 郁英 なかやま・いくえい
長浜教区 德満寺門徒

これを読まれている皆さんにとって、忘れられない人はおられますか？

きっと何人かの顔が思い浮かぶのではないでしょうか。

正直に申し上げて、私は真宗の教えや考え方について詳しいわけではありません。ご縁があって宗務所に関わるようになりましたが、家がお寺というわけではありませんし、それまでは自分の家が真宗大谷派の門徒ということはなんとなく知っていたものの、それくらいのものでした。

そのような薄い関わりでありましたが、赤本があれば正信偈を読むことができました。それは私が小学生のころ、祖母と一緒に夕方のお勤めをしていたからです。

祖母は初孫ということもあってか、私のことをとても可愛がってくれました。そして、一緒にお勤めをするととても喜んでくれました。自分が称えているものが何かはわかっていませんでしたが、もっと喜んでほしいから一緒にお勤めをしていました。

いつからか一緒にお勤めをすることはなくなってしまいましたが、体で覚えたことです。しばらくぶりに赤本を手にとっても正信偈を読むことができたことには驚きました。

まさかこのような形でお寺に関わり、また慶讃法要のテーマ委員になるとは思ってもいませんでしたが、そのころから何か不思議な繋がりがあったのかもしれません。

私は、高校卒業後、進学のために実家を離れました。その当時は海外で働きたいという気持ちがあり、将来地元に戻ることはないだろうと考えていました。しかし、数年前に私は地元長浜に帰り、今は地域の場づくりや教育など様々な角度から地元に関わる活動をしています。まさかという思いですが、これも不思議なものです。

そして、私が地元に戻ろうと思ったきっかけは、一緒にお勤めをしていた祖母でした。社会人として働き始めて数年後に祖母が亡くなった時に、自分も「死ぬときは長浜で」と思ったことが大きな理由です。

今回はお寺に関わる大きなきっかけをつくってくれた祖母のことを中心に書きましたが、生まれてから現在に至るまでの様々な人との出会いや別れを通して、いまの私自身が形作られています。意識するしないに関わらず、出会った時点で何かしら変わっているのです。そして、変わるのは自分だけではなく、関わった相手も同様です。

人間という言葉は「人の間」と書きます。最初から「その人」というものがあるのではなく、様々な人と関わることによって、結果的にその人が形作られていく。そのようなものではないかと思うのです。個性や個人という言葉には、どこか最初から決まっているような響きがありますが、それはこれまでの経験によって変化してきたものであるし、今後の出会いを通して変わっていくことができるということでもあります。

今回のテーマ委員の会合では毎回侃侃諤諤（かんかんがくがく）の議論をしてきたわけですが、その場自体が私にとっては新しい考え方に出会う機会でありました。この経験を通して私は考え、感じ、多かれ少なかれ変化をしました。

今回のテーマを目にされた方が、それによって何か少しでも考え、感じることがあったとしたら、それが最大の成果なのではないかと思います。

Shinran 850th 800th

「無碍の光明は無明の闇を破する恵日なり」

湖西
川那邊 惟奈 かわなべ・ゆいな
近江第二十六組 即得寺

「南無阿弥陀仏　人と生まれたことの意味をたずねていこう」という慶讃テーマを目にしたとき、私は衝撃を受けました。婉曲表現でなく、「南無阿弥陀仏」というお念仏そのものが、はっきりとテーマとして掲げられていたため、そのあまりのまっすぐさに心が貫かれたのでした。

母はこの春、病に倒れました。無菌室に入っている母に会うことが叶わず、不安は日々募るばかりです。このような状況に直面し、「死」の問題がこれまで以上に身近なものとして自分に迫ってきます。私たちが一人残らず死ぬ身を生きているという事実。どれほど大切で愛おしい存在であっても、いつか必ず別れていかねばならぬ人と生きる事実。抗うことができない当たり前の道理だけれど、なんと理不尽で残酷な事実を背負いながら生きているのでしょうか。死ぬ身でありながらなぜ生まれてきたのか。そして死が待っているにも関わらず、なぜ生きるのか。また、いつかはこの世での命を終えていく存在を生んでしまったことについても、子どもの寝顔を見ながらふと考え込んでしまいます。これまで生きてきたすべての人が自分以外の死を悼み、そして自分自身の死にであっていったという事実に思いを馳せると、その深い悲しみが思われ、また人間が宗教とともに生きてきたことに改めて頷かされます。

「南無阿弥陀仏　人と生まれたことの意味をたずねていこう」

お念仏を申し、この命をいただいているという事実に向き合うということ。今、他でもない私が、このテーマを通して改めてお念仏、仏法、そして命とであっていかなければならないところに立っていると思います。

母と一緒に過ごしていた時には軽やかにやりとりしていた色々な言葉が、母と離れてみるとひとつひとつ重みをもった言葉に思えてくるから不思議です。

「闇のなかにいるから光が見えるのかもね」

昔、母が何気なく言った言葉です。その時はなるほどね、と軽い返事をしたのですが、最近この言葉を思い出す度に、この心細い暗闇を照らす光とは何かと考えています。母の病を通して、家族や周囲の人の存在が、一層かけがえのないものに感じられます。互いを案じ大事に思い合っている存在であるということにであい直すことができました。

思えば私は、いただいた命と言いながらも、それを自分の所有物であるかのように思い上がった生き方をしてきました。そのような私が、お念仏を抜きにただ「人として生まれたことの意味」を自らにいくら問うてみても、真理にであうことはできないのではないかと、今考えています。その根本にお念仏を据え、仏法を通してその意味を考えなければ、人と生まれ生かされている意味をかえって見失うばかりであるとこのテーマに気付かせていただきました。

「無碍（むげ）の光明（こうみょう）は無明（むみょう）の闇（あん）を破する恵日（えにち）なり」

という親鸞聖人のお言葉が、このテーマとともに心に響いてきます。自分の思いでは間に合わないと自覚するとき、お念仏という光明が「人と生まれたことの意味」「命を終えていくことの意味」を照らし出してくださるのだと気付かされます。

数えきれないご縁によって私にまで届けられた命。命にかけられた願いを、お念仏の生活の中で問い続ける生き方がしたいです。

地区または組お待ち受け大会特集

慶讃法要

26 近江第二十六組

滋賀県西部を縦断する比良山地。南は比叡山に連なり、琵琶湖を見下ろすようにそびえ立つその姿は、まるで巨大な屏風を思わせる。琵琶湖の西部に広がる滋賀県高島市は、森林が面積の七〇%を占め、その深い山地が湖に注ぐ水の三分の一を生み出すと言われる。対岸には彦根や長浜の街が見渡すことができ、古くから越前敦賀や若狭小浜と畿内を結ぶ交通の要衝であった。

梅雨の走りとなった六月十一日、高島市ガリバーホールにおいて、宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃法要　近江第二十六組お待ち受け大会（第十九回同朋大会）が開催された。十二時半の開場前から組内スタッフの方々が会場の準備に動き回っておられ、受付ロビーでは次々に到着する参加者を手指消毒で出迎える。コロナウイルス感染症により、この二年間は同朋大会を中止されてきた。現在も様々な意見や考えがあることも承知の上で、今回の大会を準備されてきたとのこと。十三時の開会の頃には、座席の間隔をとられた約五百席の会場はほぼ埋まっていた。

開会の真宗宗歌に続いての勤行は、住職・坊守・門徒の代表がステージ上に一緒に出仕され、正信偈同朋奉賛を唱和。次の佐々木秀博組長の挨拶では、「この同朋大会は住職・坊守・門徒が一堂に会する、組にとって一番大事にしている行事の一つであり、三年ぶりに開催できたことを共に喜びたい」と述べられた。

続いての講演は岐阜高山教区不遠寺住職の四衢亮氏。慶讃法要テーマである「南無阿弥陀仏　人と生まれたことの意味をたずねていこう」を講題に、冒頭大河ドラマ「鎌倉殿の13人」を引き合いに出され、宗祖が生きた時代は弓と矢で殺し殺され、力による支配の社会であったこと。そうした人間が作りあげてきた世の問題をこそ、宗祖は課題としたのであり、その中で本願を拠り所として立教開宗されたのが浄土真宗であったこと。現代もまた軍事力と経済による支配・被支配の世界にあって、自らの罪業性を教えに尋ね、我が身を尋ねていく歩みが往生浄土の生活であると話された。

引き続き、パネルディスカッションとして、住職・坊守・門徒代表が二名ずつ登壇され、それぞれの教えとの出会い、テーマの受け止めについて講師を交えて語られた。パネラーの門徒代表の女性は、家族と死別したことを通して、生きていくことの苦しみが教えを聞く契機になったこと、人との繋がりが支えになったことを語られた。お寺が聞法の場であり、また人と人の出会いの大切な場であると感じた。約一時間のディスカッションの時間は、講義を聞きっぱなしにしないこと、それぞれの課題として聞いていくことを願いとして設けられたという。

この地域には江戸時代から連綿と続く「高島秋講」という法座が伝わる。僧俗ともに教化聞法の場が今日まで伝統されてきた。教法を通して「同朋」として出遇う場が開かれ続けてきた土壌が残っている。閉会の挨拶に立った組門徒会長の藤野雲平氏の姿には、様々な時代状況の中でも創意工夫して、聞法の場を相続してきたことの、比良山の如き、誇りと気概がにじみ出ていたように感じた。

教化広報部会　藤川秀行
井上啓子

報告

湖南地区お待ち受け大会実行委員会報告

二〇二一年七月の湖南地区教化委員会総会において、湖南地区においては慶讃法要のお待ち受け大会を地区として開催することが決定され、そのための実行委員会を立ち上げることが取り決められました。その後、実行委員として各組から男女一名ずつ推薦いただくよう、組長、坊守会長にお願いし、推薦いただいた十一名と事務局員で構成する実行委員会が立ち上がりました。

近江第二十六組
お待ち受け大会の様子

昨年十月三十一日に第一回実行委員会が開催され、これまでの経緯と慶讃法要のお待ち受け大会を湖南地区で開催することの願いを確認しました。湖南地区では、『こなん』八十五号でも掲載しましたとおり、「準備段階」、「本番」、「総括」を含めた全体をお待ち受け大会としたいという願いのもとに、丁寧に取り組みを進めたいと思っています。また『真宗』二〇二一年六月号に掲載された池田勇諦氏の「慶喜奉讃に立つ」を輪読するなど、慶讃法要をお迎えすることの意味、願いについても確かめました。

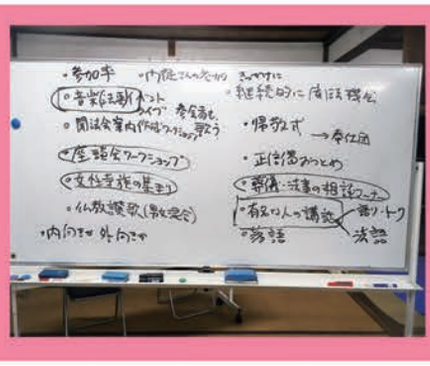
十二月五日に第二回、四月十日に第三回実行委員会が開催されました。ここではそれぞれ実行委員が現場で感じている課題を座談形式で話し合いました。新型コロナウィルスの感染拡大は大きなインパクトがありましたが、むしろそのことによって慢性的に抱えてきたそれぞれの寺院の問題点が顕在化したということも、参加した委員から語られました。また、五月十五日に開催された第四回では、全体会形式で、これまでの話し合いをもとに、どのようなお待ち受け大会にしていくのかを話し合いました。誰を対象に、場所や内容など、これまでの経緯をもとに考えました。それぞれの委員からの幅広い意見がある中で、大会の中に盛り込めない内容については今後の湖南地区教化委員会の事業の中で取り組んでいくことも可能であることも確かめました。次回以降、さらに内容を具体化し、深めていく予定です。

今回は、新たに実行委員会を立ち上げ、これまで互いに面識のなかったメンバーが多く集まって議論を進めているところですが、それぞれの委員が抱えている課題を忌憚なく話し合える場にすることを最初に取り組みました。このことを通じ、当初の願いが少しでも反映されたお待ち受け大会に繋がればと思っています。なお、これからでも実行委員会に参加したいと思われる方がおられれば、湖南地区の事務局または各組組長までご一報をください。実行委員会はまだまだ動き出したばかりです。是非ともご参加ください。お待ちしています。

湖南地区教化委員会　沙加戸　崇

湖南地区
お待ち受け大会
実行委員会

左：話し合いの様子
右：板書



各地区等のお待ち受け始まる

来年のご本山での宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃法要をお迎えするにあたり、京都教区では地区または組でお待ち受け大会を開催します。現在の進捗状況のおしらせです。

山城地区　各組で独自に開催

山城第３組　2022年 12月 9日（金）　伏見別院　講師：平原 晃宗 氏

湖南地区　地区で開催

2023年 5月 6日（土）　栗東芸術文化会館さきら

湖西地区　各組で独自に開催

近江第25東組　2023年 6月 18日（日）　願心寺（長浜市）　講師：秦 信映 氏

丹但地区　各組で独自に開催

丹波第１組	2022年 10月 16日（日）
丹波第２組	慶讃法要後に検討
丹波第３組	検討中
但馬組	検討中

石見地区　各組で独自に開催

石東組	2022年 10月 1日（土）　明清寺（浜田市）　講師：結柴 依子 氏
石西組	検討中

教区坊守会

2022年 12月 8日（木）　リーガロイヤルホテル京都　講師：藤場 芳子 氏

真宗大谷派 京都教区『慶讃だより』2022年秋号
発行人 篠岡 誓法（真宗大谷派京都教務所長）
発行日 ２０２２（令和４）年10月１日
発行所 真宗大谷派京都教務所　Tel：075(351)5260
〒600-8164　京都市下京区花屋町通烏丸西入
Eメール　kyoto@higashihonganji.or.jp
表紙絵「信心～本願力にあいぬれば～」
伊藤はるか

第7号
全8号

真宗大谷派京都教区ホームページ
京都教務所　検索

編集後記

関西弁で謝る時に「堪忍してください」と言うことがあります。「堪え忍ぶ」ということから考えて、背景には許され難いこと、取り返しのつかない事柄があるという前提があります。しかし私の日常感覚として、謝れば許してもらえることを前提にしている節があります。子どもの喧嘩を仲裁するときも「こんなに謝っているから許してあげなさい、いつまで怒ってるの」と。ウクライナの映像を見るにつけ許されないこと、取り返しのつかないことが起こっています。謝っても済まされないことがあることは明白です。８月１５日を前にして韓国でのインタビューで、ある女性は日本人は謝っていないと言っていました。謝ったら許してもらえると思っている私の感覚のゆるさを指摘しているのだと思います。戦争の事実は、取り返しのつかない事実という重さであり日常感覚とは大きな隔たりがあるように思います。（教化広報部会　副幹事　沙加戸 崇）